

能『ロミオとジュリエット』を観て

木佐貫 洋

KISANUKI Hiroshi

昨日は素晴らしい能を鑑賞させていただきました。大阪の友人も東京まで来た甲斐があったと述べていました。またあらためて感想を書かせていただきます。

先日、(2015年12月4日)、NHKの朝の番組で山田洋次監督が、映画作りについて、「想像することがリアリティです」と述べていました。誠に含蓄のある言葉とと思いました。さて、今回の上田先生作「能・『ロミオとジュリエット』」を観て、なるほど山田監督の述べる通りと改めて思いあたりました。人間の心のリアリティもまさに個人が想像するしかありません。「本当に愛しているのか、愛していないのか」は己自身の心に問うてみるしかないのですが、また、そのように思うのも誠に心のリアリティに違いないと思うのです。上田先生の「能・『ロミオとジュリエット』」では、青春の男女の愛の普遍的な一つの形をまさにリアリティに表現されていたと思います。

能は極限にまで人の想像力を逞しくして鑑賞する芸能（芸術）です。バルコニーの有名な場面やキャピレットの霊廟の場面をはじめ、各場面が誠にシンプルに設定されていて、観客は想像を膨らませるしかないのです。能のもついわゆる仕掛がここでも大いに発揮されていました。まさに能が惹き起させる人間的リアリティが彷彿と湧き上がってきました。男女の愛の形、それを取り巻く社会的様々な条件との葛藤は今日でもある姿です。それらをシンプルに能の形式美の中に取り込み表現することによって、かえって今日の市井に生きる我々の様々なリアルな思いを表現することに成功していると思いました。

また、最後のロミオとジュリエットの霊が相舞（中ノ舞）しながら昇天する場面での地謡が謡う詞、「愛児の非業に迷い覚め。怒りも解けて赦し合う。赦す仲とはなりにける。この世に生きては純粹に。仇（かたき）を愛せる青春は。死を経て一つ安らかに。王者となりて蘇る。これぞ真（まこと）の愛の賜物」この中に上田先生のスピリットが大いに込められていると感じました。そして、先生の思いである「世の中の人々が赦し合える世界」が現実（リアリティ）になって欲しいともつくづく思いました。

(ISHCC 副会長、大阪市旭区)